

レンズの目 霜柱についての教材映画を作ることになり、低温室で霜柱を作った。いわゆる 関東の赤土を用い、二時間ほどかかって霜柱が見えるようになる。こういう現象を映画で見せるには微速度装置というを使う。二時間の現象を 20 秒で見せようというのである。撮影した画面を見ていると、あっというまに霜柱がよきによき立ちならぶ。見ていると実におもしろい。「砂漠は生きている」もこの手を用いているし、「米の一生」や「海辺の生物」もこの手法を生かしている。われわれが見ておもしろいというのは、映画のレンズをとおして現象を見ると、新しい視野が開け、研究も飛躍的な進歩をすることになりそうだからである。

教材映画は、同じ映画仲間では、一番貧乏くじを引いたもので、さんたんたる苦労を重ねて経営しているものらしい。劇映画にくらべると九牛の一毛どころの比較にもあたらないらしい。そういう教材映画でさえ、研究をしているものにとっては、うらやましいのがいつわらざる現状である。われわれは 16 ミリのレンズを通してさえ自然現象を自由には見られないでいる。全く同じことを植物専攻の友人から聞いた。映画会社が撮った 16 ミリのフィルムをむりに借りてきて研究をしているという。頭を下げるのはいやだけれども、こうでもする以外に、いい方法はないとなげいている。

異常高温 東京では年の始めから高温がつづいている。7月20日までの状況では平年より低くなった日はわずか 42 日にすぎず、総日数の 21% である。だから毎日平年より気温が高いと予報すれば 80% 近くはあたることになる。もっともこの平年値は最近 50 年間の平均値からの偏りであるから、最近の気温温暖化の傾向を考へて、最近 20 年間の平均値からの偏差をとってみると、平年より低かった日は 52 日となり、総日数の 26% で、やはり高温の連続であることにはまちがいが無い。近年で今年にかなり似た年は昭和 25 年 (1950) である。この年は 50 年間の平均値から低かった日は 7 月 20 日までで 52 日であったが、それでも今年よりは 10 日ほど低温の日が多いのである。この年は台風が 8 月に群発生した年で、9 月の始めには台風ジェーンが近畿地方に来しゆうした。昨年の天気図を見ると日本付近の気圧配置は昭和 25 年にかなり似ている。

実生活に直接に大きな関係を持った短期間にわたる異常気象はわり合に注目される、あまり実生活に関係しない長期にわたる現象はとかく忘れられ勝ちである。新聞なども毎日のトップ記事ばかりを追っているとかえって本質的な動きがわからぬことが多い。屑屋に売る前や、大掃除で畳を上げた時に下から出てきた古新聞をよみ直して思わぬ発見をした経験のある人は少くあるまい。

毎年ひらかれる気象学会に、発表ができる自由をもっている人は限られている。あの講演目的をみても、殆んどは大学の教室に所属しているか、あるいは研究所に所属している。そして、国民が気象学によせる期待とあるいは気象技術者が毎日の仕事のなかから期待するものと学会の研究内容が、ますます遠くなっているようにさえみえる。

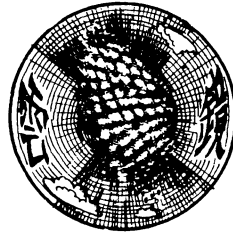
先日、大阪でひらかれた学会に、私財をはたいて出席した技術者もいたそうである。学会に入っても総会に出席できない数多くの会員も多い。

日常研究活動ができる人には、たしかにそれが現実の生きた仕事の中に生かされることを望んでいる。又学会にも出席できない多くの研究者、技術者をもっと研究できる環境、知識を交換できる組織をのぞんでいる。だが双方に、すぐそれが実行できるにふさわしい具体的条件は殆どないというのが現状である。

何一つをとらえてみても頭をぶつけてしまうほど大きい抵抗さえかんじるのである。われわれのひかえ目な声はもっと大きくひろげてよいのではないだろうか。

大阪で行われた数値予報の演習はたしかに一つの解決の方向ではあるが、道はまだ遠い。

(αΩ)



気象技術学を確立せよ 去る三月、異常に長い期間陰うつな天気が続き、それが異常現象であるか、否かと論議がたたかわされたことがあり、それが文芸春秋

にとり上げられ、批判されたことがあった。気象学的に異常であるかないかの論議ではあったが、この論議で人間の生活環境に対するこの現象の影響を度外視した点が批判されたと記憶している。

気象現象が人間のあらゆる行動を何等かの形で規制するということは否めない事実であり、人間の社会行動、生産過程において、気象技術の持つ役割りの重要なことは、この事実に立脚している、われわれが予報を出す場合、いくらその予報が気象学的に適確であったとしても、たとえば渦度の集積が何時どこにいくらあると予報したとしても、利用する方にそれが何を意味し、どのような影響を与えるかわからないならば、その利用者にとっては予報は無価値となる。予報は相手を考慮して出されてしかるべきである。と同時に気象現象を気象学的に考察するのみでなく、それが人間行動を規制するのだということ念頭において考察すべきであり、その意味で気象技術学の本格的な体系化と研究が必要となる。ことに気象災害を考察するには、むしろ気象技術学的な考察が必要となるし、他の災害に関連のある学会との密接な提携のものに総合的な研究が必要となる。(M生)